

座右の銘



流れる水は澱まず濁らず己を知るものは剛し

田中 純子

理事・副学長（霞地区・教員人事・広報担当）
大学院医系科学研究科 医学分野 疫学・疾病制御学 教授

師と尊敬する方にこれまで何人か巡りあってきました。その中のお一人から、小学校を卒業する際に渡された師の写真とともに贈られた言葉です。「流れる水は澱まず濁らず己を知るものは剛し」。当時12歳の私は、全く意味はわかりませんでした。澱まないように、濁らないように、己を知るようにと努めながら、その後も過ごしてきた記憶があります。

大学に入ってもこの言葉は気になっていました。論語や誰かの言葉の引用でないかと調べましたが、これというものは見当りませんでした。しかし、その後公私を含め、困難なこと辛いことがある度に、この言葉を何度も思い出しました。辿り着いた私なりの解釈は、「綺麗な水であっても澱むと腐る、日々歩みを止めず活動することが大事。些細なことで歩みを止めることのないように」。前文はそれでも理解した気がしましたが、後文が難解でした。老子に「知人者智、自知者明」というのがあります。「他人のことをよく知っている人は智者、自分のことをよく知っている人は明知の人」という意味です。他人のことを理解して議論や意見をするのはせいぜい「智」者にとどまる。己を悟り弱さを含めて受け入れ、己をコントロールする力を持つ者が「明智の人」ということのようなようです。12歳でこの言葉を贈られ、長い年月が過ぎましたが、まだまだ座右に置いて精進しなければならない銘だと思っています。



人生、「諸法無我」で行こう！

入船 正浩

大学院医系科学研究科 歯学分野 歯科麻酔学 教授

今年は1年遅れの五輪の年ですが、五輪の歴史の中でも、わずか14歳で金メダルを獲得したアスリートの「今まで生きてきた中で一番幸せ」などの名言が生まれています。名言の中でも数千年前に仏陀の残した言葉は私にとって最高のもの、つまり座右の銘です。「諸行無常」は特に有名で、知らない人はいないでしょう。諸行はあらゆる現象を意味し、それは常に変化しているという真理です。生には必ず死が訪れることを理解しなさいということですが、半数の人が癌になり、これだけコロナが流行していても、身内の死はなかなか受け入れられないものです。「諸法無我」は、あらゆるものは単独で存在することは無く、すべては関係において生じるという考えです。つまり、すべての出来事はそのもの自体（我）では無く、不変の実体はもたないという教えです。即ち、ものは考えよう、ということ。このたった二つのことを受け入れることができれば、この世の苦しみから解放される（涅槃）と仏陀は言っています。諸行無常、諸法無我は人生や研究、すべてのことに当てはまります。物事は移ろいますし、その時々にもものやことに囚われていては善く生きることはできません。生命科学においては、細胞は常に生化学変化を続け、細胞や組織、器官はお互いに関係をもって活動していることがわかっています。もし実験結果が自分の仮説と異なっても気にしない、ものは考えよう、そこから新たな実験を始めましょう！